

Ⅱ 千葉県における里親会活動

1. 千葉県里親会活動について

一. 初心に返って

千葉県里親会会長廣瀬タカ子

そのほとんどが海と河川に囲まれている、一見、のどかな房総半島ですが、この千葉県にも里親会が発足して四十五年余りの年月が経ちました。温暖な風光のひだにも幾多の労苦が悲喜こもごも水脈をひいている訳です。

実は私の場合、実親が里親を務めていましたので、単なる里親対里子の図式だけではなく、それを見守る実子の境涯というものが、今でも生々しく思い出されます。もし自分が里子だったら何を求めたのだろうか、親はなぜ里親に踏み切ったのだろうか、そして家族とは一体何なのだろうかそんな多くの疑問が、二代目里親への足掛かりとなったのでした。

里親になるきっかけは、まさに百人百様です。縁あつての里子も、それを迎え入れる実子もさまざまです。肉親のきずなさえ危ぶまれる時代にあつて、これは並大抵のことではありません。しかし、いざ里子を受託して新しい生活が始まると、親の立場、子供の立場、家族の立場が、さまざまな角度から垣間見えてくるような気がします。そんな時、いかに崇高な理念よりも、その日一日が悔いのない、それぞれの立場を全うした精一杯の生き方であつて欲しいと願うのです。そうした積み重ねを”努力”と呼ばれる方もあるでしょう。しかし、そんな生易しいものではないことを、とくに里子を受託された方々はよくご存じのはずです。

未来、希望、自信といった、きらびやかな道標をめざしながらも、時として子供たちから教えられることの多いのが現実です。私が抱き続けた疑問への探求も、いつしか色褪せて、子供の頃の実体験が何の役にも立たなくなっていることに気がきます。そう、私の立場がとうに入れ替わっていたのです。親としての初心こそが、実は求めていた答えだったのです。しかも、その答えは膨大です。理詰めではなく、その人その人なり
の心、愛、本音—その呻吟に裏打ちされた行動こそが、いつか子供たちの成長によつて報われるのだと言い聞かせております。

「やっぱり子供は可愛い、理屈なんて何にも要らない。そして大変な子供こそ心から

離れない」私の親がよく言っていたプラス志向を、まず前面に押し立てて、一人でも多くの縁(えにし)作りに、県内三百人余の登録里親の皆さんと手を携えていきたいと願っております。